

起業家としての三島億二郎 (1) : 社会関係資本の形成について

Okujiro, Mishima's life as Entrepreneur
The process of Clustering Industry in Nagaoka

長岡技術科学大学 准教授 綿引 宣道

I はじめに

越後長岡の産業の発展について、経済史の観点からは石油業を発端に(内藤 2000)金融業や工作機械をあげるのが通例である。実際にどのような人がそれら企業を作りだし、それらを運営する人を育てたかについては、教育史で小林虎三郎の国漢学校(明治3-4年)と関連して取り上げられることはあっても(坂本 2011a, b)、それ以降の経営史や歴史社会学の観点からはあまり扱われない。

さらに小林虎三郎に比較して、三島億二郎¹の功績はあまり表立てて扱われていないのが現状である(秋谷 2001)。どこにでもある一地方藩の農業中心の地域から偶然とはいえ産出する石油を活用し、明治中期には日本有数の一大産業地域を作り上げた立役者として三島億二郎を無視するわけにはいかない。

三島億二郎は下級とはいえ、武士の家庭に生まれ育ち教育を受けて来た。成人後は江戸詰の経験を経て様々な人材と知り合う機会を作り、北越戊辰戦争後の明治2年には長岡藩の大参事となり、藩士の中でもかなりの重要な役割を担った旧士族である。

彼が最も活躍したのは、北越戊辰戦後の長岡藩なきあとの復興政策であった。彼自身比較的容易に帰農・帰商できた郷土や卒士に近い存在ではあったが、彼自身の転換や旧長岡藩士全体のみならず、農工商に大きな影響を与えている。

戊辰戦争後直ちに指導的立場から実際に長岡藩最後の藩校である国漢学校を設立し、また起業し、長岡に産業を根付かせ、困窮状態にあった多くの士族階級を救うだけではなく、現在の産業の基盤を形成している。教育の場と企業の中間的位置づけである産物会所、女紅場の開設など産業復興、小学校・長岡洋学校等の教育促進整備、病院や銀行の設立、北越植民社による北海道開拓を行った。起業家であり官僚でもあった。長岡の産業の発展プロセスを理解する上で、この特異な存在に注目した。武士として教育を受けて来た人物が、同僚の士族を帰農・帰商を実行させるに必要な資源(ヒト、モノ、カネ、情報)をどのように手に入れたのだろうか。戊辰戦争時は既に43歳で当時の平均寿命に達していたわけだが、思想の観点からも十分に成熟している年齢であると思われる。発想の転換を上手く乗り越えるのにはどのようにしてきたのか。そこで本稿ではそのうち生誕から戊辰戦争直後の明治2年まで、すなわち長岡藩士として生きた期間の彼の行動原理の基礎となる思想・人脈をはじめとする社会関係資本の形成について論じて行く。

II 社会関係資本

1 社会関係資本の概要

社会関係資本(Social Capital)は、以前は社会資本とも訳されていたこともあったが、日本語の語感からすると土木インフラの印象が高いため、現在は「社会関係資本」が使われている。この概念によると、社会学においては個人の行動はその人物が所属する人的ネットワークに大きく影響を受けるというものである。そもそもコミュニケーションの繋がりによって人と人との間に信頼が生まれ、その結果相互利益をもたらす協同と協調が行われるようになり、あわせて規範が確立し、自発的な秩序が保たれる。そしてそのコミュニケーションスタイルや行動規範は、所属するコミュニティに大きく依存するとしている(Coleman 1988, Putnam 2000, 金光淳 2003, 宮川・大守 2004)。

この点について Lazarsfeld and Merton (1954)は、「社会的相互行為は、ライフスタイルや社会経済的特徴が似

¹ 三島億二郎は、鋭二郎、億次郎、宋右衛門、億二郎と改名し、川島家から伊丹家へ養子に行き、戊辰戦争後に三島の姓に変わっている。特に断らない限り、混乱を避けるために本文中では三島億二郎に統一する。

た個人間で行われる」と述べている。これは「類は友を呼ぶ」の格言を理論化したものであるが、この理論は一つのコミュニティにとどまるものではない。本来的に人は職場、学歴、地域コミュニティなど複数のコミュニティに所属し生活している。

これについてLin(2001:55)は、「行為者は社会的紐帯を通じて行為に必要な資源へアクセスしている。それらの資源のことを社会関係資本」として定義する。そして、そもそも個人は特定の1つのコミュニティに所属するだけではない。複数のコミュニティに属することによって、行為の道具として資源を獲得している。この場合社会の信頼性や規範の形成は、どのようなコミュニティに所属しているかに依存しているとしコミュニティ単位に資本があるとする説、または「多少なりとも制度化された関係の永続的ネットワーク、互いに知り合いでありメンバーであることと関係する、現実および潜在的リソースの集合」といった個人の資産とする見方がある(Bourdieu1986)。

この社会関係資本の概念には、個人資源を第一に考える。その内訳は以下のようなものである。

- ・ 個人が所有する物的な財
- ・ 個人が受けてきた教育
- ・ 階級、家名といった象徴的な財

これらを基礎に、直接的あるいは間接的なつながりによってアクセスできるコミュニティから獲得する資源を考える。その中には、他者の所有物または他者の社会的地位に帰属した資源も含む。

教育に関する社会資本の形成に関する研究は、社会階層移動の観点では、どのような教育を受けたか特定の学校に所属したかが社会階層の決定要因の一つである(荒井, 松塚, 山本 2010)。本研究で言うならば、三島億二郎は、崇徳館で徂徠学をはじめとする経世済民思想を学び、下級とはいえ30石取りの武士階級であったという事実が、後の人脈形成と彼の行動を分析するのに重要な資本となることを意味している。

続いて、社会的関係資本の質的側面については次の分類がなされている(Lin2001:80)。

- ・ 上方到達可能性：上方到達可能性とは紐帯を通じてアクセスできる最上位の資源
- ・ 異質性：紐帯を通じて到達可能な資源を持つ地位の範囲
- ・ 拡張性：到達可能な地位の数

これは行為者自らが所属するコミュニティに限らず、仲介者を通じての異なるコミュニティへのアクセスのときに特に重要となる。もちろんその背景には、「社会的資本は特定の目的や特定の行為者にとって役立つ才能(Coleman1990)」としての側面を逃すわけには行かない。

2 社会関係資本の命題

Lin(2001:78-97)によれば、社会関係資本の理論は7つの命題を持つとしている。

命題1 社会関係資本と行為の成功との間には、正の相関がある。

これには3つの利点がある。第1に、行為者が仲介者を介して働きかけるとき、仲介者が持つ社会的地位を利用できる点である。つまり行為者が、それほど地位が高くなかったとしても、仲介者の地位が高ければその影響力を生かすことができることを意味する。第2に、仲介者が構造を見渡すのに有利な立場にある場合、行為者本人にとってよりよい情報をもたらす可能性がある。第3に、良好な地位にある仲介者は、良い社会信用となる。したがって、成功させるためにはより地位の高い仲介者を求めることになる。

命題2 地位の強み命題

初期の地位が良いほど、行為者は良い社会関係資本を獲得しやすく、また用いやすい。これは、高い地位の人が似たような高い地位の人との社会的つながりを持ちやすくなることと、マタイ効果²(Marton1968)が進む原因でもある。

命題3 強い紐帯の強み命題

紐帯が強いほど、社会関係資本は表出的行為の成功に影響しやすくなる。

² マタイ効果(Matthew effect)とは、「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう」(マタイ福音書第13章12節)の引用から来た言葉で、財の偏りが進むことを表している。

アクセス可能な資源は、行為者本人が感情的に強く結ばれている他者との紐帯とプラスに関連している。この紐帯の強度は、関係の強度、親交の頻度、互惠的相互関係、認知された義務感 (Granovetter1973) で表される。その一方で、強い紐帯は閉鎖的でもある。

命題4 弱い紐帯の強み

弱い紐帯ほど道具的行為にとって良い社会関係資本へのアクセスがやさしくなる。すなわち紐帯が弱いほど異質な資源へのアクセスがし易くなり、上方到達可能性が高くなる。

命題5 位置の強み命題

ネットワークにおけるブリッジ(橋渡し役)近くにいる個人ほど、道具的行為にとって有効な社会関係へとアクセスしやすい。ここでいうブリッジとは、異なるコミュニティの両方に「顔が利く人」であり、この顔が利く人がいなければ両者は隔たれている状態にある。

命題6 位置と地位の交互作用命題

道具的行為にとって、位置の強み(ブリッジへの近接性)は、ブリッジでつながる集団間の保有資源の違いによりかわってくる。

命題7 ネットワーク効果の構造依存命題

ネットワーキング(紐帯あるいは位置)の効果は、行為者がヒエラルキーの頂上付近にいるか、底辺にいるかといったヒエラルキー構造により制約される。

3 本研究での論点

以上の研究は、比較的社会が安定している状況下における社会関係資本に関する研究である。上記の命題に問題が全くないとは言い切れない。一つは、社会的地位の上昇に関わる視点に意識が集中しており、激動期の没落に関しては説明がつきにくい。もう一つは、社会変動が激しい場合、すなわちそれまでのコミュニティの構造そのものが変化してしまう場合における説明が意図されていないところにある。

したがって、命題の全てが成り立つとしてみるのではなく、社会構造の変動期において成り立つものを抜き出していくことにする。

Ⅲ 長岡藩士としての社会関係的資本

1 時代背景

三島億二郎が生まれたのは文政8年(1825)で明治25年(1892)に死去している。幼年期に文政11年(1828)の三条大地震により長岡町と郷中七ヶ組で、全壊2193軒、半壊827軒、死者264人、けが人404人の記録が残っている³。天保の大飢饉では、長岡城付近には大量の難民が押し寄せたことが記されている⁴。このころの三島は満9-11歳ぐらいで、城下が異常な状態になりつつあったことを理解できていたであろう。天保8年(1837)には長岡藩に隣接する天領の柏崎で騒動⁵が起き、通常の年齢であれば藩校に通っていた年齢であったことから考えれば、親を通してだけでなく崇徳館の教師や学友からも世相や情報を手に入れていた可能性はある。全国的に見てもこのころから百姓一揆は全国的に過激になり、打ちこわしなど従来の一揆の作法から外れた戦闘的なものになっていた(井上2002)。

助教に任ぜられる前の4年間は、外国船が日本に上陸するなど日本全土で緊張感が高まっていた時代である。崇徳館では成績は優秀であったようで、弘化3年(1846)に21歳で助教に任ぜられている。物心がついたころから天変地異を何度も経験しており、また外国船の強引な開港要求などの国難を救おうとする発想が出てきても当然であろう。後述するが、開国派と攘夷派が藩内での対立もあったようである。

この頃から長岡藩の財政も急速に悪化し、特に嘉永2年(1849)に入ると藩が8万両の御用金を町・郷中に命じる

³ 『長岡懐旧雑誌』中巻より。『翻字懲震誌録』によれば震源で長岡から20km程の距離にある三条では、全潰12,859軒、半潰8,275軒、焼失1,204軒、死者1,559人、けが人2,666人であった。

⁴ 『長岡懐旧雑誌』中巻より。

⁵ 柏崎騒動は、浪人の鷲尾甚助などが扇動し数千人の一揆であった。『長岡懐旧雑誌』中巻によれば、長岡藩からも鎮圧に向かっている。

など財政的にひっ迫し、更には嘉永6年(1853)には栃尾騒動⁶が発生した。当時20代で江戸詰であったが、佐賀藩の便宜により槍持ちとしてペリーの来航を間近で見ている⁷。この頃に佐久間象山や吉田松陰と知り合い、彼らの思想に影響を受けている。それまで国学と漢学を学んできた者としては、洋学に接するなど異質性を体験している。

30代になると幕府が諸外国との不平等条約を結び、安政の大地震により国力が低下していくのを間近で見ている。40代前半では、長州征伐に参加しその後の大政奉還、兵学校取締になり戊辰戦争と敗戦を経験し、明治2年(1869)柏崎県の大参事に任命される。混乱期とはいえ、下級武士が長岡藩の大参事とその後の柏崎県の大参事に任命されることは上方到達の典型的な事例である。

本稿は誕生の文政8年から明治2年までの記述であるが、この間は彼を取り巻く環境は常に地震や凶作、外国からの脅威といった社会不安に置かれていた。江戸文化の最盛期を過ぎ、日本全体がひたすら下り坂を体験している。概略を年表1に記す。

年表1 三島億二郎誕生前から戊辰戦争まで⁸

西暦	和暦	年齢 (満)	日本全体	長岡藩での出来事	三島億二郎とその周辺
1824	文政7		関東・奥羽で大風雨による大洪水。		
1825	文政8	0	異国船打払令。佐久間象山誕生。		伊丹市左衛門の次男として誕生。鋭次郎と名づけられる。
1826	文政9	1	シーボルトが江戸に到着。		
1827	文政10	2	頼山陽が『日本外史』を松平定信に贈る。西郷隆盛誕生。	河井継之助誕生。	
1828	文政11	3	シーボルト事件。本居春庭死去。	小林虎三郎誕生。三条地震。	
1829	文政12	4	富嶽三十六景完成。	強風のため町内の町屋が倒壊する。	
1830	文政13 天保元	5	吉田松陰誕生、伊勢御蔭参り大流行。児玉南柯死去。大久保利通誕生。	江戸幕府の上屋敷に、江戸幕府の子弟教育の就正館設けられる。	
1831	天保2	6	長州藩一揆。十返舎一九没。	牧野忠精が老中を辞任、同月牧野忠雅家督を相続し、第10代長岡藩主に就任。藩が借財の元利返済を一時凍結する。	
1832	天保3	7	頼山陽死去。鼠小僧次郎吉処刑。		

⁶ 栃尾騒動は嘉永6年8月23日に紬の不景気がきっかけとなり、翌日には役人の不正糾弾などに要求が変わり1万人が参加し打ち壊しなどを行った。『栃尾市史(上)』

⁷ 『三島億二郎傳』

⁸ 『三島億二郎傳』、『慶応大学百年史』

1833	天保4	8	天保の大飢饉。桂小五郎誕生。播州一揆。	洪水と冷害で大凶作。田中春回誕生。	
1834	天保5	9	天保の大飢饉。水野忠邦老中に就任。	藩が窮民に救米を支給。	
1835	天保6	10	天保の大飢饉。		
1836	天保7	11	天保の大飢饉。東北地方で餓死者10万人。郡内騒動。	朱子学派の高野松陰、秋山景山に代わり崇徳館都講となる。長雨で大凶作。新潟町の若狭屋・北国屋等の抜荷事件(天保6年)が発覚する。	
1837	天保8	12	大塩平八郎の乱。柏崎代官所襲撃。モリソン号事件。	城下へ流民1000人に上る。	
1838	天保9	13	大隈重信誕生。	小林虎三郎、新潟で佐久間象山と会う。	
1839	天保10	14	蛮社の獄。	岸宇吉誕生。	
1840	天保11	15	渋沢栄一誕生。「唐船風説書」によるアヘン戦争情報の到達。	庄内藩で三浦領地替え反対一揆。	
1841	天保12	16	天保の改革開始。林述斎死去。伊藤博文誕生。	長岡船道と蔵王側の、天保9年以來の紛争に幕府評定所で判決下る。	
1842	天保13	17	異国船打払令廃止。近江国三上山で一揆発生。	藩が千手町村・四郎丸村と街道筋の村に、5年間の期限つきで取扱商品数を大幅に許可。榎野直、外山脩造誕生。	
1843	天保14	18	イギリス軍艦サマラン号、八重山諸島に上陸し測量を行う。青山延于死去。平田篤胤死去。水野忠邦老中を罷免。	幕府が長岡藩に新潟町の上知を命じる。10代藩主牧野忠雅が老中に就任。	
1844	天保15 弘化元	19	フランス船アルクメール号、那覇に入港。	藩が城外で軍事訓練を開始。長岡町大火。	川島家に養子に入る。
1845	弘化2	20	アメリカ船マンハッタン号、イギリス船サマラン号来航。猪飼敬所死去。	藩主忠雅が幕府老中兼海防掛に任じられる。小林虎三郎、崇徳館の助教になる。	
1846	弘化3	21	東インド艦隊のジェームズ・ビッドル提督がヴァインセンス号とコロンビア号を率い、江戸湾浦賀沖に来航して開国を求める。	藤野善蔵生まれる。長岡浸水、1546人死亡。	崇徳館の助教になる。

1847	弘化 4	22	善光寺地震。弘化三閉伊一揆。	宮路村が鎮守の御手洗い地を用水溜とする工事を行う。	
1848	弘化 5 嘉永元	23		長岡藩総実高 13 万 6 千石計上。	
1849	嘉永 2	24	英国軍艦マリナー号相模三浦郡松輪崎沖に停泊、江戸湾測量。	藩が借財 23 万両の解消のため、町・郷中に前例のない 8 万両の御用金を命じる。	野口沢二郎の妹と結婚する。若殿様の小姓になる。
1850	嘉永 3	25	佐久間象山、江戸深川に洋砲術塾開く。	小林虎三郎、藩命により江戸遊学。長岡領内浸水により 3 万 5 千石損耗。	江戸詰になる。佐久間象山の塾に通う。
1851	嘉永 4	26	ジョン万次郎、アメリカ船で帰国。	小林虎三郎、佐久間象山の塾に入る。長岡領内浸水により 4 万 3 千石損耗。	
1852	嘉永 5	27	吉田松陰東北遊歴。	藩が 4 万両を水原町と各地の豪商・豪農 21 人から借用。河井継之助、齋藤拙堂に入門。	37 石取りになる。
1853	嘉永 6	28	ペリー来航。三閉伊一揆。	栃尾郷の打こわし(栃尾騒動)。藩が済世館を設立し、医学教育開始。	江戸お目付格になる。佐賀藩の便宜で槍持ちとしてその場に列して、米兵に近接する。
1854	嘉永 7 安政元	29	日米和親条約、日英約定調印。松蔭事件に連坐して佐久間象山捕わる。	小林虎三郎が下田開港に反対し、神奈川開港を老中牧野忠雅に進言し、帰藩・謹慎を命じられる。	河井継之助、小林虎三郎、鶴殿団次郎春風らとともに鋭次郎も意見書を提出。最新鋭の西洋兵器配備を主張したが、藩内門閥の抵抗にあい職を免責されて帰藩した。学塾を開く。渡部進、三間市之助、花輪馨之進、他塾生。
1855	安政 2	30	安政大地震。日露通好条約、日仏和親条約、日蘭和親条約。	領内第一の富豪蒲原郡吉田村の今井孫兵衛を藩の勝手本方、勘定所御金取扱に任じる。 藩が勘定所の機構を改革。長岡城内武器役所から出火。	
1856	安政 3	31	佐久間象山、塾居謹慎中海防意見書を幕府に呈して国防を促す。広瀬淡窓死去。二宮尊徳死去。洩染一	城泉太郎誕生。	温海、石巻、仙台など東北地方を河井継之助と遊歴する。

			揆。		
1857	安政 4	32	長崎鮑ノ浦に日本最初の製鉄所(造船所)ができる。	牧野忠恭が家督を相続、第11代長岡藩主となる。河井継之助、家督を相続し外様吟味役になる。牧野忠雅老中辞職。	
1858	安政 5	33	安政の大獄。日米修好通商条約。日英・日蘭・日露修好通商条約。	宮地村騒動。河井継之助、佐久間象山に入門。牧野忠雅死去。	
1859	安政 6	34	吉田松陰、江戸伝馬町の獄に投じられる。橋本佐内死刑。南山騒動。	河井継之助が山田方谷に学びに行く。小林虎三郎、「興学私議」を書く。	藩主・牧野忠恭(忠雅の養子)に子・鋭橘(後の牧野忠毅)が誕生したため、鋭次郎から億次郎に改名。
1860	安政 7 万延元	35	桜田門外の変。日葡・日普・日伊修好通商条約。		
1861	万延 2	36	ロシア軍艦対馬占領事件。	河井継之助、国老牧野市右衛門に具申。	
1862	文久 2	37	生麦事件。高杉晋作英国公使館焼き討ちにする。	藩領の内、蒲原郡 3000 石が上知となり、刈羽郡 3316 石を代知として与えられる。刈羽郡の内 19 か村が長岡領とされ、これを刈羽組とする。牧野忠恭京都所司代になる。	
1863	文久 3	38	薩英戦争	牧野忠恭が老中に就任。藩主忠恭が外国事務取扱となる。	億次郎、川島家を相続する。
1864	文久 4 元治元	39	下関戦争。佐久間象山死去。	主君牧野忠恭が江戸老中として英米仏公使と面談する。	
1865	元治 2 慶応元	40	蛤御門の変。第一次長州征伐。	河井継之助が外様吟味役から郡奉行に任じられる。藩主忠恭が第二次長州征討に出兵を命じられ、大坂に向け藩兵を率いて江戸を出発。	億次郎、御目付役になる。養父死去。
1866	慶応 2	41	再度長州征伐、薩長同盟。	藩主忠恭が大坂より帰る。河井継之助町奉行になる。小林虎三郎「藩兵改革意見書」を提出。	

1867	慶応3	42	ええじゃないか。大政奉還。	牧野忠訓が家督を相続し、第12代藩主となる。河井継之助が家老職に任命される。崇徳館の寄宿舎造士寮が設立される。河井継之助が藩主の名代として上京、京都御所へ建言書を提出。	
1868	慶応4 明治元	43	戊辰戦争。新潟港国際港になる。新潟裁判所ができる。	崇徳館の教授たちが、新政府軍への恭順の意見書を藩に提出。新政府が牧野鋭橘の相続を許し、2万4000石の新領をもって長岡藩の再興を許す。	億次郎と笠原文平が慶応義塾を支援する。兵学校取締になる。長岡藩内は混乱。小千谷談判、河井継之助死去。三島宋右衛門と改名する。
1869	明治2	44	戊辰戦争。新聞紙印行条例。名主の制廃止。版籍奉還。	国漢学校を開校。久須美三郎ら、ハリ（米）を雇い越後油田調査。牧野忠毅、版籍奉還によって、長岡藩知事となる。藩が産物会所を設置し、藩士扶助のために機業の育成をはかる。信濃川が氾濫。	三島億二郎に改名する。藩主の命令により上洛し、津田正臣 ⁹ に長岡藩救済を陳情する。牧野頼母、小林虎三郎（文武総督）、三島億二郎（副執政）の3人を藩の大参事に任命。65石になる。東京へ出張し、長岡藩の窮状を陳情。ランプ会始まる。

2 家庭環境

生まれは伊丹家の次男として生まれ、当初は鋭次郎と名づけられている。父の伊丹市左衛門正行で、悠久山神社（蒼柴神社）の担当であった。この神社には、藩主牧野家の代々墓がありその管理を任されていた。実父と義父は職場と同じくし仲が良かったこと、義父の川島家には男子がいなかったことから養子縁組が決まった。父の禄は安政年間のおきに30石で、義父も37石¹⁰と長岡藩の中では低いほうの身分であった。

記録は僅かしかないが、実兄の政由（まさよし）が優秀で、藩儒の山田愛之助が治国経済説を唱え、思想集団「桶宗（おけしゅう）」を作り、政由がその首領となって藩中を指導した。この中に、河井継之助（120石安政分限帳）や小林虎三郎（120石）と億二郎がいた（今泉1957）。格は大きく違ったが、同じ思想を持つ仲間としての感覚を持っていたようである。次項の崇徳館でも触れるが、長岡藩は徂徠学を教えており、経世済民思想の徂徠学に興味を持つに至り、この兄の影響をかなり、受け後にリーダーシップを発揮した可能性がある。

嘉永2年に24歳にして、野口沢二郎（60石）¹¹の妹と結婚するが、億二郎本人は明治維新まで37石にとどまった。当時の身分制度の中では上層の階層に属するが、藩の中での扱いは石高で見るとかなり下級の武士であったことが分かる。

3 崇徳館における教育内容

長岡藩の藩校である崇徳館は文化5年（1808）設立されている。教育内容は国学と漢学が主たる内容（今井、金子、高橋、阿部、大塚編1995、今井、阿部、金子編1999）であるが、使われている教科書はどの藩校でも使われている

⁹ 当時、弁事（太政官の事務職）であった。後に和歌山県の初代知事になる。

¹⁰ 「長岡藩嘉永分限帳」『長岡藩政史料集(6)長岡藩の家臣団』長岡市

¹¹ 同上

ようなオーソドックスなもので、特徴があるとは言い難い。ただ教え方については、多くの藩校が古義学と朱子学のどちらか一方であるのに対して、崇徳館は両方を教えていた。このことで複眼的にもものを見るように教えていたようである。

また、儒学による治世者の心構えや倫理観を教えるだけではなく、経世済民の思想が強い荻生徂徠が教育に用いられていた。徂徠学はそれまでの倫理観による領民の救済では問題が解決できないとして、社会科学的要素を取り入れたとの評価がある（たとえば野村1934）。確かに当時としては四民平等の思想¹²や賈金の防止や貨幣の流通量の制御として藩札の発行制限など画期的なものであったが、当時の身分制度など社会状況からみれば実現可能性は弱いものであった。とはいうものの、儒教の書物からの倫理から実践を重んじる科学への思考の変化は大きいものである。特に、崇徳館の教授で三島億二郎を教えた山田愛之助は治国経済説を唱え、これもまた先述したように三島の実兄である伊丹政由に大きな影響を与え、兄は桶宗という一党の首領として藩内の若手を指導した¹³。この治国経済論の詳細については資料がないため内容を詳細に知る由もないが、おそらく儒学のような倫理を中心とするより財政学に近いものであったかも知れない。

その後、弘化3(1846)年には助教として教員として採用されていることから考えても、崇徳館の中でも優秀であったと考えられる。

河井継之助は、後の安政6年(1859年)に山田方谷を訪ね経世済民の教えを乞い、長岡藩の財政再建を試みている。特に山田方谷の思想は政治思想というよりは現在の経済学に近く、小林虎三郎、河井継之助と仲が良かったことから彼を通じて現代でいうところの財政を学ぶところがあったと思われる。

4 江戸詰め時代の人脈

・佐久間象山の塾

三島に大きな影響を与えたものとして、嘉永2年(1849年)からの江戸詰の勤務経験がある。この江戸在勤中に佐久間象山の塾に通うようになり、そこで吉田松陰とも親しくなった。佐久間象山が主催する塾には、吉田寅次郎(松陰)・小林虎三郎・勝麟太郎(海舟)・坂本竜馬・橋本左内¹⁴、武田斐三郎¹⁵・河井継之助・山本覚馬¹⁶・加藤弘之¹⁷、木村軍太郎¹⁸、津田真道¹⁹、小林虎三郎²⁰らが入門し、来訪者には西郷隆盛が来ている。これらの塾生を見て行くと、多岐にわたる分野でかつトップクラスの人材と知り合う機会を得ている。

『漢土の学のみにては空疎の議を免れず、又、西洋の学ばかりにては道德義理の講究これなく候』²¹の言葉に見られるように、佐久間象山の学問に対する見方は、当時の他の学者と比べて極めてリベラルであり、役立つものに徹底していたようである。通常の洋学だけではなく、砲術や兵学も教えており、その教育内容もかなり多岐にわたったようだ。

・ペリー来航の体験

¹² この思想は、明治維新後に作られた長岡藩最後の藩校国漢学校で活かされ、武士以外の町人階級も入学可能で学校内に刀の持ち込みを禁止していた。

¹³ 『三島億二郎傳』17ページ

¹⁴ 橋本左内は、越前国福井藩士、安政4年(1857年)以降、由利公正らと幕政改革に参加するが安政の大獄で斬首された。

¹⁵ 武田斐三郎は函館五稜郭の設計者。白山友正「武田斐三郎伝」1971年

¹⁶ 山本覚馬は会津藩士、砲術家であった。明治維新後は地方官・政治家として初期の京都府政を指導し、同志社英学校(現同志社大学)の創立者新島襄の協力者でもあった。青山霞村『伝記・山本覚馬』大空社1928年

¹⁷ 加藤弘之は、但馬出石藩の出身。オランダ語、ついでドイツ語を学んで蕃書調所教官に任ぜられ、維新後は大学大丞、侍読、元老院議官を経て東京大学初代総理となる。明六社を結成。

¹⁸ 木村軍太郎は佐倉藩士で蘭学者、安政4年にハリスの国書を翻訳している。『蘭学者木村軍太郎伝』村上一郎：印旛郷土研究会 2008年

¹⁹ 津田真道は、美作国津山藩出身、1857年(安政4年)蕃書調所に雇用されて、1862年(文久2年)には西周とオランダに留学しライデン大学に学び、4年後に帰国する。その講義録を1866年(慶応2年)に『泰西国法論』と題して訳出する。明六社を結成、『津田真道 研究と伝記』大久保利謙編、みすず書房、1997年

²⁰ 小林虎三郎は、先に述べたように病気がちであったため、

²¹ 『象山全集』第4巻、242頁

先述したが、三島は佐賀藩の便宜で、槍持ちとしてペリーの黒船を間近で見ている。これは、佐久間象山のもとで学んだ兵学をそのまま活かす機会を得ているが、「6月に寒さを覚ゆ」²²と恐怖を漏らしている。この経験が洋学を積極的に取り入れ、長岡藩が取るべき政策に関して意見書を出すきっかけとなった可能性は高い。

しかしながら、藩内では従来型の軍を推進する派と洋式化を推進する派で意見が対立し、三島は塾居を命ぜられ長岡領内に戻ることになる。なお、佐賀藩は後に明治維新を推進した藩であり、北越戊辰戦争で敵軍となっている。

5 戊辰戦争前

・目付役

嘉永6年(1853)に江戸屋敷における目付役を任じられる。江戸詰の長岡藩士の風俗規律を管理する役割を任されていた。しかし翌年に、最新鋭の西洋兵器配備を主張した意見書を出したが、藩内門閥の抵抗にあい職を免責される。長岡藩に戻ることで、すぐに学塾を開く。『三島億二郎傳』では、「渡部進、三間市之助、花輪馨之進、他塾生」とあるが、完全な塾居を命ぜられた訳ではなく、軍事知識の有用性を認められていたようである。

その後、藩主の信頼が厚かったようで、元治2年(1865年)に長岡藩全体の目付役になる。

・兵学校取締

慶応4年(1868年)には、佐久間象山の塾で学んだ兵学を公式的に活かせる状況となる。河井継之助と仲が良かった三島億二郎であるが、北越戊辰戦争に関しては真っ向から対立した。稲垣平助²³の日記『誌録』によれば、恭順派は酒井貞蔵、山田愛之助、藤野友三郎、伊藤幹蔵、陶山善四郎といった崇徳館の教授たちで、既に徳川家が恭順している以上は戦う理由がないとしている。彼らに対して主戦派は河井継之助、山本帯刀、牧野一郎右衛門、稲垣主税、花輪求馬、三間市之進、村松忠治右衛門は、それまでの薩摩藩の幕府への態度に対する反感が原因のようである(今泉1971:72)。

6 戊辰戦争後

長岡藩は7万4千石から2万4千石へ減俸されたことにより、武士階級は俸禄を大幅に削減せざるを得なくなった。これを機会に現在でいうところの大量解雇に相当する帰農・帰商を進めざるを得なくなった。

大参事就任

戊辰戦争後は、長岡城下の8割を焼失する状況であり、まさに経国済民の思想を学んだ経験が生かされるどころとなる。まずは、江戸詰で作上げた明治政府の人脈をフルにいかしたと考えられる。たとえば、億二郎の日記によれば明治2年にたびたび江戸に向かい、兵学や国際情勢に関する本を買っており、慶応義塾に通い始めたばかりの藤野善造や笠間藩士ともほぼ毎日のように面談している。当初は津田正臣弁事への長岡藩の救済米の陳情であったようだ。途中からは、土佐藩士との面談も増えている。会話の内容は彼の日記『芝山日記』にも詳細は書かれていないものの、長岡藩の白峰駿馬²⁴や橋本久太夫が海援隊に所属していたことから、会社制度について学ぶきっかけを作っていた可能性はある。

さらに、鍋島中納言から蝦地開拓を任される²⁵。文久元年に一度ロシアに対馬を占領された経験があり、さらに松前藩以北がロシアからの侵略を受ける可能性があった。そこからも明治維新の緊張感は相当なものであったはずである。この点について三島億二郎は自身の経済思想を以下のように述べている。

「予、嘗テ云、時間即日カト金貨ヲ愛重シテ、適宜ニ消費スル者ハ一箇ノ人傑也ト、蓋シ勉強ト節蓄トハ身ヲ成立シ、家ヲ起スノ本ニシテ、国天下富強ヲ致スモ又之ニ基カサルヲ得ス、国内ノ人民自主自立ヲ得テ而後其国独立不拔ノ国ト論スベシ、モシ、智識未タ開ケス、作業随テ拙ク、人民自主独立スル不能ノ国ハ、決シテ富強ヲ為ス事アタハス、而シテ言辞上ニ於テ独立不拔ヲ論スルモ、他国ノ者誰カ之ヲ許サンヤ」²⁶

この文章からもわかるように、国防の経済は密接かつ不可分と考えていたことが分かる。実際、維新前後は薩摩藩や会津藩をはじめとする偽の天保通宝や薩摩藩のてんぷら金と称する二朱金の偽物が大量に出回り(徳永2010)、

²² 『三島億二郎傳』

²³ 当時は長岡藩上席家老であった。

²⁴ 白峰駿馬は鶴殿団次郎の実弟であり、土佐藩藩士との間接的なつながりは早くから持っていたと思われる。

²⁵ 『芝山日記』明治2年5月21日

²⁶ 『芝山日記』明治2年11月19日

太政官札でもかなりの偽物が出回っており、新潟港でも報告されている(青柳2011)。さらに地方通貨や藩札や私札の大量発行により額面通りに交換されない(鹿野2011)状況を体験していると、明治政府に助けを求めても実質何も支援が受けられない事を理解していたであろう。支援を待つより自らが動くことによって解決しなければならないと覚悟を決めるにいたったであろう。

IV 考察

ここでもう一度社会関係資本に立ち戻ることしよう。命題1では「社会関係資本と成功は正の相関」にあるとした。三島億二郎は下級武士でありながら長岡藩の大参事になり、北越戊辰戦争後の復興の実質的な指導者であった。当時の身分制度からすれば上層階層であるが、武士の身分からすれば下級であることを考えると、命題1は完全性を満たしているわけではなさそうである。おそらくこれは社会変動期における、地位構造の大きな変化が阻害したと考えられる。命題2では「地位の強み」が謳われているが、日本全体で見ても明治維新以降の上級士族はほとんどが没落し、豪農・豪商が名実ともに上層階層に入れ替わる。長岡藩でもこの変化に耐えられなかった士族が数多くいた。

確かに命題1と2では完全性は担保されていないが、命題3以降はまさに命題どおりになったと言える。命題3の「強い紐帯の強み」では、戊辰戦争における領民との協力体制である。優秀な農民あるいは商人に士族株を与えるなどしていた²⁷ため、農民や商人から武士になったばかりの人、さらにその身分を残していた親戚と関係が北越戊辰戦争に協力したことから、領民と藩士が強い紐帯を形成した可能性がある。特に、彼らは下級士族にとどまるが多かったため三島億二郎もつながりを持ち、彼自身が兵学校取締であった経験から戦友として強い紐帯を形成したと考えられる。

一方命題4の弱い紐帯については、象山の塾における人脈であろう。わずか数年の塾通いであったが、戊辰戦争後に活躍した人物とのつながりを持っている。特に慶応義塾との関係は、政治よりも産業界の実力者たとえば渋沢栄一とのつながり六十九銀行の設立に至る。

命題5の「位置の強み」と命題6の「位置と強みの交互作用」は、まさに三島億二郎の真骨頂といつてのよい。特に彼の戊辰戦争直後の地位は、長岡藩の大参事に続き柏崎県の知事であり、行政官としてはこの地域でのトップである。佐久間象山の塾や慶応義塾など東京での産業界との橋渡しの役割を果たしている。橋渡し役は異質な人や組織を結びつける役割を果たし、Resource Generatorとして外部の主体から情報や機会を獲得し協力関係を構築するのに必要とされる(Woolcock and Narayan, 2000)。

命題7の「ネットワーク効果の構造依存」については、明治政府からこの地域のヒエラルキーのトップとしての役割を求められており、旧藩士に支持する立場にあった。

これらを総合すると、三島億二郎は社会的資本を最大限に使える立場にあったと言える。

鹿毛(2008)の研究では、「ソーシャル・キャピタルの高い地域では、災害からの復興からも高いとされる。たとえばAldrich(2008)は関東大震災後の関東地域のデータを用いて、高いソーシャル・キャピタルに特徴づけられる地域では震災後の復興も比較的速かった」という分析を示しているが、まさに三島億二郎が中央政府と長岡、武士階級と農工商階級の橋渡しの役割を果たしており、長岡の社会関係資本を体現している。

ここでは未だ述べていないが、明治3年以降の国漢学校・長岡洋学校が更に身分間の橋渡し役をすることになる。

V 結びにかえて

三島億二郎の活躍は、小林虎三郎や河井継之助の社会的評価、特に伝記の数や歴史研究からすると今一つ感がある。しかし、北越戊辰戦争後の経済的立ち直りに関しては、小林虎三郎の貢献よりも遥かに大きいものであり、経済史あるいは経営史の観点から見ても非常に特異な存在として注目すべき存在である。

この観点から本稿では、三島億二郎が生まれたあたりから長岡藩と幕府の動き、北越戊辰戦争で敗戦した明治2

²⁷ たとえば、六十九銀行をはじめ多くの企業を立ち上げた岸宇吉は唐物商から士族株を手に入れる寸前であり、阪神グループの基盤を築いた外山脩造は庄屋から士族になる途中であった。

年までを中心にしてその世相と彼の行動を紹介してきた。ここまでの三島億二郎は、長岡藩士として江戸での活動から他の藩士より情報も人脈も得ていたことが分かる。河井継之助はたびたび江戸に出ていたが主戦派になり、東征軍と一線を構えるために江戸屋敷の資産を換金し、当時の最新鋭の武器であるがとリング砲を買うことになる。一方の三島億二郎は戦いを避けて列強の諸外国からの侵略に備え、内戦状態で国力を消耗するよりは国内で団結すべきとして恭順派となったのではないかと考えられる。

ともあれ江戸詰の勤務で佐久間象山の塾に出入りしていたことが、明治3年以降のランプ会や国漢学校以降の長岡学校設立に大きな影響を与えたことは容易に想像がつく。本稿ではその範囲を超えてしまうので詳細を論じていないが、特に明治元年から2年にかけての笠原文平(ランプ会²⁸メンバー)とともに慶応義塾への支援は、啓蒙思想や産業育成、そしてそこで教育を受けた長岡藩士藤野善蔵を呼び戻し長岡洋学校の教育と運営に当たらせている。この藤野善蔵は明六社の客員会員でもある²⁹。この流れから三島億二郎が啓蒙活動に熱心になるのは当然で、特に武士の帰商・帰農は彼にとっての啓蒙活動の実践であった。

格上の思考の方向転換に戸惑う士族を「食わせる」ための努力は計り知れない。これに対して、彼自身は家の格が低かったので、自らが商売人になることはそれほど抵抗なかっただろうし、彼の地位だからできたことでもある。

本稿で論じてきた社会関係資本を活かした教育機関の運営と企業に関しては、次稿で詳しく論じていく。

参考文献

- 秋谷紀男(2001)『三島億二郎日記』からみた長岡第六十九国立銀行の設立過程—国立銀行条例改正と三島億二郎の行動』、『政経論叢』明治大学政治経済研究所 69(4-6), 725-753 ページ
- 安藤英男(1987)『河井継之助の生涯』, 新人物往来社
- Aldrich, Daniel (2008), “Social, Not Physical, Infrastructure: The Critical Role of Civil Society in Disaster Recovery,” Paper Prepared for the Annual Meeting of the American Political Science Association, Boston, MA.
- 荒井一博, 松塚ゆかり, 山本宏樹(2010)「教育の社会資本形成機能：理論と実証」, 『一橋社会科学』, 2: 20-38
- 青柳正俊(2011)『開港場・新潟港からの報告』考古堂
- Bourdieu(1986), “The form of Capital”, *Handbook of theory and research for the sociology of education*, edited by John G. Richardson, pp241-258 Greenwood Press
- Coleman, James. (1988). “Social Capital in the Creation of Human Capital”. *American Journal of Sociology Supplement* 94: pp95-120.
- 今泉省三(1957)『三島億二郎傳』覚張書店
- 今泉省三(1971)『忘却の残塁』野島出版
- 今井元彦、金子芳雄、高橋良政、阿部博則、大塚智恵子編(1995)「長岡市立中央図書館(互尊文庫)目録-漢籍篇」『漢籍-整理と研究』第五号
- 今井元彦、阿部博則、金子義雄編(1999)『長岡市立中央図書館(互尊文庫)目録：國書篇』長岡市立図書館
- 稲葉陽二(2011)『ソーシャル・キャピタル入門 - 孤立から絆へ』中央公論新社
- 井上勝生(2002)『開国と幕末変革』講談社
- 鹿野嘉昭(2011)『藩札の経済学』東洋新報経済社
- 金光淳(2003)『社会ネットワーク分析の基礎—社会的関係資本論にむけて』勁草書房.
- 鹿毛利枝子(2008)「ソーシャル・キャピタルをめぐる近年の研究動向」安全安心社会研究ワーキングペーパー WP-2008-003
- <http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/katsudo/pdf/wp2008003j.pdf>

²⁸ ランプ会は明治2年ごろから始まり明治11年ごろまで続いたといわれる、国漢学校の教師と士族・商人・医師・神官・職人との異業種交流会であり、これが長岡の産業の基盤となった。

²⁹ 明治7年12月17日『郵便報知新聞』537号

- 慶応大学(1968)『慶應義塾百年史. 上巻』,慶応大学
- 小泉其明(2007),新津古文書研究会編『翻字懲震毖録-小泉蒼軒文庫-文政十一年三条地震の記録』新津古文書研究会
- Lazarsfeld, Paul Felix and Merton, Robert King (1954). “Friendship as a Social Process: A Substantive and Methodological Analysis.” In *Freedom and Control in Modern Society*, Morroe Berger, Theodore Abel, and Charles H. Page, eds. New York: Van Nostrand, 18-66.
- 宮川公男・大守隆 (2004) 『ソーシャル・キャピタル—現代経済社会のガバナンスの基礎』 東洋経済新報社.
- Nan Lin (2002), *Social capital : a theory of social structure and action*
- 筒井淳也 (翻訳), 『ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論』 ミネルヴァ書房(2008)
- 内藤隆夫(2000)「宝田石油の成長戦略」『社会経済史學』 66(4), 389-411, 483, 2000-11-25
- 野村兼太郎(1934)『荻生徂徠：社会科学の建設者人と学説叢書』三省堂
- 野沢慎司 「第6章 人的資本の形成における社会関係資本 …ジェームズ・S・コールマン」『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』 金光淳訳、勁草書房、2006年。ISBN 978-4326601943。(原著：Coleman, James (1988). “Social Capital in the Creation of Human Capital” *American Journal of Sociology* 94 Supplement: S95-S120. The University of Chicago Press.)
- 大久保 利謙(2007)『明六社』講談社
- Putnam, Robert D. 2000. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon & Schuster. =柴内康文訳. 2006. 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房.
- 坂本 保富(2011a)『米百俵の主人公 小林虎三郎—日本近代化と佐久間象山門人の軌跡』学文社
- 坂本保富(2011b)「佐久間象山の洋学研究とその教育的展開：幕末期における軍事科学を媒介とした洋学の普及現象」『教職研究』信州大学全学教育機構教職教育部 4:1-23
- Merton, R. K. “The Matthew Effect in Science” *Science*, 159, 1968.
- 佐藤誠(2003)「社会資本とソーシャル・キャピタル」『立命館国際研究』立命館大学国際関係学会 16(1), 1-30
- 徳永和喜(2010)『偽金づくりと明治維新』新人物往来社
- Woolcock M, Narayan D. (2000), “Social Capital: Implications for Development Theory, Research, and Policy” . *The World Bank Research Observer* 2000;15(2):225-249.